

「大腸肛門疾患の診療指針」

東京大学第1外科助教授 武藤徹一郎 編著

弘前大学第1内科教授

吉 田 豊

本書の編・著者である武藤徹一郎助教授とは欧米の腸疾患研究施設への訪問団で三たび長期間旅行を共にした。したがって同助教授の大腸肛門疾患にける情熱と学識の深さについては誰よりもよく知っているつもりである。先生の豊富な学識経験をもとにした解説書が欲しいものだとかねがね思っていた次第である。

本書を一読して、さすがに武藤助教授の著書だとまず思った。一言では言い表しにくい、スマートであり、非常によく整理された本であるということである。内容も重厚であるが、それを要領よくわかりやすく纏めてあるところが、さすがなのである。大腸肛門病を学ぼうとする若手研究者、臨床家には、まず本書を勧めたい。

頁をめくりながら、どんな点を配慮して本書が書かれてこれほど魅力的になっているのか考えてみたが、読み終って幾つかの点に気付いた。それらは本書の特色でもあり特徴ともなっているので列記してみたい。

(1) 目標を高いところに置いて企画されている。序文でも述べておられるように、著者の恩師 Morson 博士らによる名著「Diseases of the Colon, Rectum and Anus」に優る内容を盛り込もうという、その意気込みが感じられる。

(2) 解説書に徹するという意図からであろう、レベルの高い内容が平易に、实际的に書かれている。学説の明らかなところと不明なところを明確に分け、豊富に織り込んだ描図が診断の手法や病態の説明を容易にしている点などはこの種の書の中で

は傑出である。

(3) 文の構成、配列が極めて読みやすくできている。頁の横のマージン(小口)を広くし、しかも小項目の見出しを付けている点が良い。私のように赤で線を引いたり、メモを書きつけないと読んだ気がしない読者には特に喜ばれる書である。

(4) 全体に内容のレベルが統一されている。近年、多人数の専門家による著書が多くなっているが、その欠点として項目間の内容レベルの不統一が挙げられる。本書は東大第1外科の中でも大腸研究グループという、いわば毎日顔を合わせている精鋭の総力で書かれた。武藤助教授のもと、目的、企画、具体的な内容などすべてが分担者に徹底したのであろう、整然としてちぐはぐがなく良書としての色彩をあまねく放っている。

本書には他にも沢山の特徴があり、入門書であっても専門書にも迫る内容を持っており、若手医師のみならずベテラン医師にも座右の1冊として推薦したい。

B5判 324頁 定価 12,800円 送料
400円 1986年 中外医学社 刊